

9月15日(金) 研究発表第9室(733)

L2 熟達度と L1 および L2 に使用されるコミュニケーションストラタジーについて L2 Proficiency and Communication Strategies in L1 and L2

岩井 千秋 (広島市立大学)

はじめに

実際の言語使用において、話者が語彙、文法、文化的知識などが不十分なために各種のストラタジーを用いて意志の疎通を試みることはこれまでの研究からよく知られるところである。このようなストラタジーは Communication Strategy (以下 CS と略) と呼ばれるが、近年の研究では話者が目的達成のために使用する CS を特に Compensatory Strategy (以下 CpS と略) と呼んで区別している。この発表は、1) CS 及び CpS 研究の先行研究について、2) 発表者が実施した L1、L2 における CpS 使用の実験の結果について報告することを目的とする。

1) CS 及び CpS 研究の先行研究について

SLA の分野で CS の研究が注目をされるようになったのは Varadi が 1973 年に "Strategies of Target Language Learner Communication Message-Adjustment" と題する論文を発表してからであるが、その研究は大きく分けて 3 つの流れからなる。まず始めは 60 年代に L1 における communication の機能面に焦点を当てた研究である。よく知られるところでは Krauss & Weinheimer が抽象的な絵を用いて S-L 間で行われるやり取りを分析して、communication が行われる際の互いの協力関係 (collaborative process) を研究したものが挙げられる。

次に、SLA で本格的に CS の研究が行われるようになったのは 70 年代の後半から 80 年代の初頭にかけてである。この時期の主なテーマは言語使用時に使用される CS の分類 (taxonomy) であり、発話者から得られたデータを基に各種の分類が試みられた。著名なところでは Tarone の CS 全般に関わる分類 (paraphrase, borrowing, appeal for assistance, mime, avoidance) や機能面にまで言及した Paribakht (linguistic approach, contextual approach, conceptual approach, mime) などが挙げられる。

そして最近の研究では、より心理学的な要素を取り入れて、SC を使用する際の cognitive processes に注目した、いわゆる Nijmegen project の名で知られる研究が挙げられる。Poullisse, Bongaerts, Kellerman, Bialystok らの研究は、80 年代初頭の CS 研究は product から CS 分類を試みたものであり、実際に言語使用者が言語の産出およびその処理を行う際の process を解明するものではないと反論してきた。Nijmegen project では、先に挙げた Krauss & Weinheimer の研究方法を応用しながら、L2 learners (Dutch learners of English) が使用する CpS の processes に注目しながら、CS と L2 proficiency との関係や L1 との関係の解明を試みてきた。

以上のように、CS の研究は、L1 における communication 機能の解明、L2 における product-oriented CS taxonomies の試み、そして L2 における CS 使用の際の processes の解明、という発展を遂げてきたというのがこれまでのいきさつである。

2) L1 (日本語)、L2 (英語) における CpS 使用の実験及びその結果について

発表者は Nijmegen project の研究に基づいて日本語母国語話者による L1、L2 の CpS 使用を調べる実験を行った。実験方法、仮説、及びその結果は以下の通りである。

9月15日(金) 研究発表第9室(733)

実験方法：大学1年生の被験者32名に対して、最初 Krauss & Weinheimer によって考案され、後に Bongaerts & Poulishse によって L2 学習者の CpS 使用の研究に使われた抽象的な絵の描写という方法をこの実験で採用した。実験は CALL 教室で行い、各絵をコンピュータモニターを通じて被験者に提示した。被験者の picture description はすべて LL 装置を使って録音し、後で書き下ろしたものをデータとして分析した。被験者を半分(各16名)に分け、第1週目と2週目に日本語/英語を異なる順序にしてこのタスクを行った。分析に際しては、この実験前に実施した TOEIC の得点に従って被験者を High Proficiency (HP)、Low Proficiency (LP) の2グループに分割し、CpS 使用状況を比較した。データの分析は使用総語数と Kellerman et. al. によって提唱された Linguistic Strategy、Conceptual Strategy (holistic, partitive, linear) のCS分類のうち後者を使用した。

仮説：

- 1) 先行研究から判断すると、日本人英語学習者の場合も、使用言語に関わりなく、実験のタスクでは圧倒的に holistic strategy が使われるだろう。
- 2) 英語による描写では、LP グループは HP グループと比較して、言語知識の不足のため日本語とは異なる CpS を使用する頻度が高くなるだろう。
- 3) CpS 使用は英語熟達度によって異なるだけでなく、与えられたタスク(この実験の場合は提示された絵の種類)によって左右されるだろう。

主な結果：

- 1) 使用総語数で比較すると、日本語の描写で2グループ間に有意差は認められなかったが、英語の場合は HP グループが LP グループの約2倍の語数で描写を行っていて有意差が認められた。
- 2) 日本語、英語間で比較すると、日本語では holistic、partitive strategies がよく使われるのに対して、英語の場合は holistic strategy の依存がより高く、有意差が認められた。従って仮説1)は棄却される。HP、LP グループ間でこれらを比較すると両者間に有意な差は認められず、今回の実験の被験者に対しては仮説2)は成り立たなかった。1)の結果と合わせると、HP グループの被験者は英語でより多くの語数を使って提示された絵について言及しているが、それは必ずしも LP グループの被験者と異なる strategies を用いているとは言えないということになる。
- 3) 仮説3)に関しては、提示された絵によって使われる CpS に異なる傾向が被験者全般に認められ、部分的ではあるがこの仮説は支持できる。CSの研究では、使用される strategies はタスクの種類によって影響されやすいと思われるので、注意を要する点である。

終わりに

発表者はこの研究の結果を踏まえ、CpS 使用は proficiency よりも学習者個人が問題をどのように処理し解決するかという cognitive な面(例えば field dependence/independence、reflection/impulsivity)との関わりが強いのではないかと仮定し、研究を進めている。発表までに間に合えば、このことについても言及したいと考えている。

【キーワード】

Communication Strategy
 Compensatory Strategy
 Taxonomy of communication strategies
 Process-oriented approach
 Nijmegen project

9月15日(金) 研究発表第9室(733)

4. 結果

Table 1: Word Counts in Japanese description

	A	B	C	D	E	F
HE	17.8	16.3	18.4	19.6	16.3	16.6
LE	16.6	16.5	18.3	15.3	14.9	16.3

Table 2: Word Counts in English description

	A*	B	C*	D	E*	F*
HE	17.0	12.1	17.5	15.3	17.4	16.9
LE	8.3	8.8	9.8	9.0	11.1	8.9

N=16 in each group. The asterisks next to the picture identification letters indicate significant group differences (two-tailed *t*-test) at the level of $p < .05$.

Table 3: Comparison of strategies in Japanese and English

	H	HP	P
JPN	17 (8.9)	69 (35.9)	73 (38.0)
ENG	62 (32.3)	41 (21.4)	55 (28.6)

N=32. $\chi^2=35.289$ $p < .01$
Figures in the parentheses are percentages.

Table 4: Comparison of two groups in Japanese description

	H	HP	P
HE	4 (4.2)	32 (33.3)	38 (40.0)
LE	13 (13.5)	37 (38.5)	35 (36.5)

N=16 in each group
 $\chi^2=4.511$ n.s.

Table 5: Comparison of two groups in English description

	H	HP	P
HE	26 (27.1)	23 (24.0)	31 (32.3)
LE	36 (37.5)	18 (18.8)	24 (25.0)

N=16 in each group
 $\chi^2=3.089$ n.s.

Table 6: Strategies across languages

JPN	ENG	HE	LE
HP = HP		12	9
H = H		3	7
P = P		10	7
HP \ni H		20	19
H \ni H		1	0
P \ni P		14	15

The equal sign means that the same strategies were used in both language sessions. The sign \ni indicates the strategies used to describe pictures in English are covered in the strategies to do so in Japanese.

主な参考文献

- Bialystok, E. 1990. *Communication Strategies: A Psychological analysis of Second-Language Use*. Cambridge, Mass.: Basil Blackwell.
- Bongaerts, T. & Poulisse, N. 1989. Communication Strategies in L1 and L2: Same or different? *Applied Linguistics*, 10(3), 253-268.
- Faerch, C., & Kasper, G. (rds.) 1983. Strategies of target language learner communication: message adjustment. *Strategies in interlanguage communication*. London: Longman.
- Kellerman, E., Ammerlaan, T., Bongaerts, T. & Poulisse, N. 1990. System and hierarchy in L2 compensatory strategies. In R. C. Scarcella, E. Anderson, & S. Krashen (eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language*. New York: Harper and Row.
- Poulisse, N. (in collaboration with Bongaerts, T., & Kellerman, E. 1990. *The use of compensatory strategies by Dutch learners of English*. Dordrent, Holland: Foris Publications.